□ □ 箕面パークデザインプロジェクト □ □

―建築からの地域コミュニティ―

学校名　修成建設専門学校
所属学科 建築学科 著者名 宮部 苺花

１．自治会の弱体化

近年、地域にとって自治体の在り方が問われています。自治体の活動に興味を示す地域住民が少なく、活動をしてもそれに参加する人数が少ないのが現状です。また、自治体の存在に疑問を持つ方もおり、自治体の加入者は減少する一方です。自治体の大きな役割であるご近所付き合いはこのような問題の中で地域のコミュニティは小さくなる一方です。

本プロジェクトは、このような問題を解決したいという自治体の想いから始まりました。昨年の本校で行った屋台プロジェクトを見た大阪府箕面市の自治体さんから、地元の公園で防災訓練をするので協力してほしいという依頼です。

前途の問題から消防訓練を開催しても参加人数が少なく、防災訓練の意味がありません。防災の意識を高め、我々が地域の人が集まれる場を作るためのコーディネーターを務め、防災・建築の連携で建築の視点からその場所をデザインすることで、人が集いたくなるようにします。

２.建築で地域コミュニティを作る

コロナでイベントの減少から子どもたちが集まれる機会の減少、ゲームや SNS による外出する子どもが少ないことでご近所でのリアルに顔を合わせ類機会が少ないです。これらはコミュニティが少なくなる主な原因だと考えます。子どもたちにとってご近所さんと顔を合わせる機会が減ったというよりも、現状が当たり前と感じていると考えます。イベントを通して地域のつながりを体験しご近所で繋がることを感じてもらいたいと考えました。

３.場所をデザインするための準備

まずは現地調査を行いました。イベント行う公園を中心にどのよう街並み、雰囲気など感じたことを記録していきました。その後 KJ 法を用いて学内でディスカッションしていきました。ディスカッションテーマとして、現代の公園の在り方やどのようなイベントで多世代の方が参加できるのか、この公園にあったデザインは何か？夏のイベントでどのような対策が必要か、主に３つがでました。

ディスカッションを進め次のようかことを実行していくことになりました。・公園にもっと愛着をもってもらうために子どもたちの手で公園を彩ってもらう。・夏の公園にコミュニティと日影をつくり屋根を設置する。・地域の人が見てもやっても楽しめるイベントをする。これらの計画から公園に屋根を設置と見学や休憩のできる椅子を作る、遊べるイベントを計画する、この３グループに分かれて計画を進めていきました。具体的なものへ落とし込むためにアイデアを出し合い、模型を作り、ディスカッションを重ね試作をしました。

屋根は日影を作るだけでなく話す場所、話すきっかけとなる場として考えました。愛着をもつというところから子どもたち自ら手を加える行為が重要だと考え、地域の大人と子どもたちが協力して色とりどりの屋根を作ることを考えました。このアイデアから軽くて着色のしやすい布を材料として選択しました。当初は手足を使って染めてもらう案でしたが、長時間肌に触れることを想定してない絵の具だと、肌が荒れる、小さな子どもは口に入れてしまう危険もあるため道具を使って染める方法を考えていきました。

特別な体験をしてもらいたかったので葉っぱで染めることを考えました。

しかし、試作すると思ったように染まらない、時間がかかるという壁にぶつかりました。次に葉っぱだけにはこだわらずスポンジ、掃除ネット、紐、など

Miyabe Maika
@syusei.ac.jp

普段の使い方とは違うものを用意してみました。このように道具の選定を考えていきましたが、やはり手足で自由に染めてもらう方法を捨てきれず、もう一度絵の具について考えてみました。安全性の問題なので食用色素を使って染められなかと考えました。思考錯誤の結果、米粉・食用色素・水を混ぜることで布に染めることができました。

次に椅子についてです。初めの段階では自治会さんと話をして木を使った椅子をつくりイベントが終わっても公園に設置しておこう、そしてその椅子を見る度に地域のみんなで楽しんだことを思い出してもらおうというアイデアがありました。行政と協議をしていきましたが、地域住民の思いがあったとしても公共の場に長く設置することは難しく、断念せざるを得ませんでした。長く設置できないということであれば身近にある段ボールで二次利用できる椅子を考えました。段ボールの耐久性とデザイン、２次利用方法、これらのことを考えながらアイデアを出すことの難しかったです。特にパルプである段ボールで人の体重を支えるというところに難しさを感じました。

子どもが中心にいることで自然と大人たちが集まってきます。イベントは子ども向けのイベントにすることで多世代の方が集まると考えました。小さな子どもでもルールがわかりやすく安全で子どもたちが楽しめるものを考え、竹の水鉄砲を使ったゲームをすることに決まりました。竹は成長が早いため、竹林などは定期的に切ってあげる必要があります。それらの余った竹を利用するため伐採から行い手作りの水鉄砲が完成しました。

４.ワークショップの日

イベント１週間前に施設を借りて地域住民と屋根となる布を染めるワークショップを行いました。ワークショップには地域の幼稚園児から小学６年生までの計 16 人が集まり、約 16x1 メートルの布９枚を全員で染めました。

計画通り手足や葉っぱなどの道具を使って染めていきました。布の量からワークショップの時間がかかりすぎて子どもたちが飽きてしまうことを懸念していましたが子どもたちは最後まで服を汚しながら染めることに熱中して楽しんでいました。

5.イベント実行日

まずは地域住民で染めた布で公園に屋根を張りました。そして、ダンボール椅子を現地で組み立て防災訓練開始までにセッティングを終えいつもの公園が彩りのある場所へと変化しました。

次に防災訓練では地震などの災害があった際に地域の子供たちがお年寄りの自宅に行って避難場所となる公園へ避難するといった避難訓練を行いました。子どもたちと我々ので地図をみながら地域のお年寄りのおうちを訪問していきました。このような訓練の中で地域の子どもとお年寄りが話をしながら公園へいく姿をみて、地域のコミュニケーションのあり方を体験として学ぶことができました。

段ボール椅子はたくさんの人に座っていただきました。防災訓練の休憩に座ってもらうこともあれば段ボール椅子が面白いということで子どもたちが遊びで座ってくれるこもありました。

イベントはみんな水鉄砲に興味津々で楽しそうな子供たちの声が響き渡っていました。

そしてその日はいつもの公園からは想像がつかないほど賑やかで明るい場所へ変身していきました。

6.このプロジェクトを通して

ワークショップでは、自分たちが思ってもみなかった子どもたちの行動に驚かされました。そして子どもたちの感性の豊かさ思い知りました。これらの感性を大事にするためにもこのようなイベントが必要なのだと思いました。

近所にどんな人が住んでいるのか知ること交流しておくことで実際災害が起こった時に自助公助、助け合うことができると思います。その面で今回のイベントをきっかけに顔見知りが増え、防災意識につなげられたと思っています。

プロジェクトの進行にはアイデアが通らない、課題が増えていくだけ、時間がない、自分の考えすべてが形になるわけではないし、活動すべてが結果となって出るわけじゃない、この３か月間には、いろんな葛藤がありました。けれどそれ以上に活動してよかったと思えた達成感がありました。

建築分野で地域でイベントしているのはよく耳にして興味がありましたが、今回の経験を通じて建物だけでなく地域コミュニティをつくることでまちづくりをしていく、建築はこれら両方を作っていく必要があるのだと知りました。